

令和6年度東アジアプロジェクト研究報告

プロジェクト研究題目	東アジアにおける文化の継承と変容							
代表者氏名	高橋 征仁							
メンバー	速水聖子、小林宏至、森野正弘、尾崎千佳、更科慎一、上田由紀子、谷部真吾、横田尚俊							
プロジェクト経費	配分額：700,000円	執行額：742,535円						
具体的な実施内容	<p>(実施内容)</p> <p>東アジア研究科の修了生たちと協力して、東アジアの比較文化に関する国際学術会議および講演活動を行った。11月30日～12月1日にかけて、中国の山東師範大学外国語学院において「区域国別研究与智库發展国際学術会議」が開催され、東アジア各地域（ロシア、中国、韓国、日本など）から地域研究の可能性が議論された。同国際学術会議において、東アジア研究科の森野、更科、小林、および東アジア研究科の卒業生3名が研究発表を行った。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・森野正弘（2024）「日本文学中楽器琵琶の面貌及其發展：關於源博雅的故事」、区域国別研究与智库發展国際学術会議、山東師範大学。 ・更科慎一（2024）「論明代中国的外語教学研究」、区域国別研究与智库發展国際学術会議、山東師範大学。 ・小林宏至（2024）「地域研究中局部性科学的可能性」、区域国別研究与智库發展国際学術会議、山東師範大学。 <p>また12月2日には同大学にて「山東師範大学 第1463回社科論壇 区域国別研究視角下的日本研究」が開催され、同論壇において更科、小林が報告を行った。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・更科慎一（2024）「中国周辺地域の漢字音の研究」、区域国別研究視角下的日本研究、山東師範大学。 <p>12月3日、同じ省内の済南大学において開催された「第12回外語文化節 異海拾珍講座」にて高橋、更科、小林の3名が講演を行った。この学術会議では、Voov(テンセント)を利用して、日本からの参加も可能にした。本研究プロジェクトから行われた研究発表は、下記の通りである。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・高橋征仁（2024）「なぜ、のび太はジャイアンやスネ夫に勝てるのか？—戦後日本における男性顔の変遷にもとづく考察—」、済南大学。 ・小林宏至「日本の代表的家族アニメと 文化人類学における研究」、済南大学。 ・更科慎一（2024）「中国周辺地域の漢字音の研究」、済南大学 <p>(連携機関 [学内外])</p> <table border="1"> <thead> <tr> <th>連携機関名称</th> <th>具体的な連携内容</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>山東師範大学</td> <td>外国語学院において国際学術会議を企画・参加した</td> </tr> <tr> <td>済南大学</td> <td>外国語学院において国際学術会議を企画・参加した</td> </tr> </tbody> </table>		連携機関名称	具体的な連携内容	山東師範大学	外国語学院において国際学術会議を企画・参加した	済南大学	外国語学院において国際学術会議を企画・参加した
連携機関名称	具体的な連携内容							
山東師範大学	外国語学院において国際学術会議を企画・参加した							
済南大学	外国語学院において国際学術会議を企画・参加した							

大学の機能強化に資する成果・効果及び目標の設定	(成果・効果) 上述した国際学術会議の開催を通じて、次のような取組を行った。 【取組①】 東アジア研究科の修了生3名が、現在の研究成果を発表した。東アジア研究科出身者たちの研究力を示すことができた。 ・盧昱安 (2022年3月修了、東アジアコラボ特別研究員)、日本大正時代の文学テキストにおける女性像の研究——白樺派を端緒として、地域別国別研究とシンクタンクの発展に関する学術会議 (於・山東師範大学)、2024年11月ほか。 ほかにも東アジア研究科の修了生が聴講者としても来場しており (たとえば山東農業大学)、新たな交流の機会を創出することができた。 【取組②】 彼らの指導教員であった教員が、比較文究の進展に関する研究発表をした (上述した5件)。 【取組③】 在学生や入学希望者に学術会議への参加を促し、将来像の形成を促した。山東師範大学、済南大学ともに100名近い聴講者がおり、講演後は進学相談も含めて積極的な質疑応答が行われた。		
	(成果目標)		
	成果目標 (計画時)	成果実績 (報告時)	成果目標の内容
	雑誌論文5件	5件	高橋2、森野1、更科1
	うち国際共著論文2件	1件	高橋1
	学会発表5件	13件	高橋7、小林6、森野1、更科3
	うち国際学会発表2	8件	高橋1、小林3、森野1、更科3
	図書1件	2件	高橋1、小林1
	国際共同研究2件	1件	高橋1
	(成果実績の補足) <論文> 1. Hirai T, Hagiwara K, Chen C, Okubo R, Higuchi F, Matsubara T, Takahashi M, Nakagawa S, Tabuchi T. (2025) The impact of adverse childhood experiences on adult physical, mental health, and abuse behaviors. <i>Journal of Affective Disorders</i> 369 1071-1081. 2. 高橋征仁 (2025) 「イケメンを科学する」『異文化研究』19: 1-12. 3. 森野正弘 (2024) 「若菜巻における皇統の交替と音楽」『国語と国文学』101 (7): 88-103. 4. 更科慎一 (2024) 「乙种本《华夷译语》“来文”里的汉蕃对音」『中国语言历史地理研究』1: 395-422 <図書> 1. (分担執筆) 小林宏至 (2024) 「福建客家と日本」ほか、周子秋 (監修)・河合洋尚 (編集) 『客家と日本：知られざる日本と中華圏の交流史』風響社 2. (基調講演録) 高橋征仁 (2024) 「子ども会の『危機』はどこから来るのか？」ほか、コミュニティ政策学会中部支部編、『子ども会と地域コミュニティの関係を考える』東信堂		

<p>成果目標達成による波及効果</p>	<p>本研究プロジェクトを通じて、価値創造の源泉となる学際的基礎研究を積極的に推進できただけでなく、「常勤教員当たり研究業績数」を大幅に伸ばすことができた。また、海外の大学と連携し、多様で優秀な留学生（やその予備軍）との交流を促進することができた。</p> <p>これらはいずれも、山口大学の中期目標・中期計画に合致することであり、大学院東アジア研究科の入学者数を改善することに貢献すると考えられる。</p>
<p>プロジェクト研究終了後の方向性について</p>	<p>成果目標達成を通して、様々な出身国・地域の大学院生・修了生との共同研究が活発化し、研究機関としても教育機関としても東アジア研究科の存在意義を国内外に示すことになる。</p>
<p>備 考</p>	

プロジェクト 研究題目	アジアの教育と文化におけるグローバル化		
代表者氏名	高橋 俊章		
メンバー	有元光彦、石井由理、葛崎偉、佐々木司、鷹岡亮、中田充、松岡勝彦、森下徹、北沢千里、山本冴里、森朋也、山本孟		
プロジェクト経費	配分額：900,000円	執行額：742,164円	
具体的な実施内容	(実施内容) 東アジア研究科で学ぶ大学院生だけでなく、海外の研究機関に在籍する卒業生や山口大学と関係が深い国際的な研究者と共に「東アジアのグローバル化と教育」をテーマにした国際学術フォーラムを2024年12月8日に開催（オンライン開催）した。具体的な内容としては、釜山外国語大学元学長であり現在は同大学日本語融合学部の名誉教授のチョン・ギヨン教授を基調講演講師としてお招きし、「アジア共同体とシティズンシップ教育を通じた大学生の意識変化」というタイトルでご講演していただいた。また、中国・台湾・インドネシア・ベトナムなどアジア各国におけるの社会・教育・文化・歴史・言語に関する研究成果発における6件の発表を行った（具体的には、留学や国際教育、言語教育と言語学習に影響する文化的背景の影響、職業教育におけるICTやAI活用について）。また、それ以外にも、東アジア地域の社会・教育・文化・歴史に関する研究を共同または個人で行った。さらに、フォーラムの成果を翌年度に学術的図書として出版する準備も行った。		
	(連携機関〔学内外〕)		
	連携機関名称	具体的な連携内容	
	該当無し		
大学の機能強化に 資する成果・効果 及び目標の設定	(成果・効果) プロジェクトの内容は、東アジア研究科設立の趣旨に合致しており、成果を今年度、国際学術フォーラムで報告するだけでなく、翌年度に学術的出版物として出版し、学術的貢献も果たそうとしている点で妥当と考えられる。		
	(成果目標)		
	成果目標 (計画時)	成果実績 (報告時)	成果目標の内容
	雑誌論文15本 (うち国際共著論文2件)	11件 (うち、国際共著10本)	国際共著の数が多く、目標は十分達成していると考えられる。
	学会発表15件 (うち国際学会発表2件)	10件 (うち、国際共同発表3件)	概ね目標を達成していると考えられる。
図書2件	2件	目標を達成していると考えられる。	
	(成果実績の補足)		

<p>成果目標達成による波及効果</p>	<p>これまで指導教員とは個別に関係が築かれていたが、本プロジェクトを通じて、修了生との研究交流を教育開発コースの一環として継続的に実施する契機となった。また、共同研究の継続により、今後も東アジアの若き研究者と関係を継続し、今後長期に渡ってまた、東アジアにおける大学とのつながりを発展・継続させることが期待できる。</p>
<p>プロジェクト研究終了後の方向性について</p>	<p>来年度以降も同様な形態での研究成果の蓄積と海外の研究機関に在籍する研究者との研究連携を強化し、今後も開催が予定されている国際シンポジウム開催に備えていく大きな契機となる。特に来年度は、今年度の国際学術フォーラムの成果に基づいて、学術叢書の発行につなげていく予定である。</p>
<p>備 考</p>	

プロジェクト 研究題目	アジア太平洋における経済・経営・イノベーション		
代表者氏名	濱島清史（文責）、古賀大介（研究科長）		
メンバー	朝水宗彦、有村貞則、小林友則、斉藤英智、石龍潭、新租隆志郎、立山紘毅、田畑雄紀、寺地伸二、角田由佳、八代拓、山本勝也、渡邊幹雄		
プロジェクト経費	配分額：600,000円	執行額：434,203円	
具体的な実施内容	<p>(実施内容)</p> <p>これまでのプロジェクト研究題目「東アジアを中心とする世界経済社会に対する感染症問題の影響」は、2023年度の国際シンポジウム「東アジアのパンデミック」そして2024年度と同タイトルの研究叢書の公刊をもって一区切りとなった。</p> <p>今後の方向性として、「アジア・太平洋における経済・経営・イノベーション」と銘打ち、以前のプロジェクト研究がそうであったように、幅広く裾野を拡げて、各自が研究に取り組みまた共同研究を行なっていくことが社会動態講座会議にて話し合わせ合意を得た。各自がそれに関連した幅の広い研究を行ってきた。具体的には、DXとイノベーションといった領域において、下記のような多様な分野における研究を実施してきた。</p>		
	(連携機関 [学内外])		
	連携機関名称	具体的な連携内容	
	山東大学	国際シンポジウムにおける研究発表	
桂林理工大学	国際共同研究		
大学の機能強化に資する成果・効果及び目標の設定	<p>(成果・効果)</p> <p>研究題目にみられるように、DXとイノベーションといった領域において、東アジアに限らず広くグローバルに、東アジア研究科社会動態講座の母体となっている経済学部経済学科・経営学科（含、企業法務コース）・観光政策学科におけるさらに多様な分野において研究成果を挙げてきた。今回、各自が様々な取り組みを行なって、下記のように、波及効果をもたらしてきた。</p>		
	(成果目標)		
	成果目標 (計画時)	成果実績 (報告時)	成果目標の内容
	雑誌論文15件	9件（書評1件含む）	
	学会発表15件	5件（うち国際学会5件）	
	図書2件	1件（東亜経済研究）	
国際共同研究2件	1件（桂林理工大学）		
<p>(成果実績の補足)</p> <p>R6プロジェクト研究計画書にも触れたように、これまでのプロジェクト研究題目「東アジアを中心とする世界経済社会に対する感染症問題の影響」に関して、さらなる深化・発展を目指すべきとしたが、学生・教職員・市民の皆さんの評価を受け、今年度、『東アジアのパンデミック』が増刷の運びとなった。記して謝意を表する。</p>			

<p>成果目標達成による波及効果</p>	<p>「アジア・太平洋における経済・経営・イノベーション」と銘打ち、東アジアに限らず広くグローバルに、東アジア研究科社会動態講座の母体となっている経済学部経済学科・経営学科（含、企業法務コース）・観光政策学科におけるさらに多様な分野における研究を実施し、各自が成果を挙げ、学生・院生・社会人・地域と波及効果を持ちながら、社会貢献を行ってきた。</p>
<p>プロジェクト研究終了後の方向性について</p>	<p>上記のように、「アジア・太平洋における経済・経営・イノベーション」と銘打ち、以前のプロジェクト研究におけるように、幅広く裾野を拡げて、各自が研究に取り組んできた。更に今後、研究テーマの絞り込みをしていき、そのうえで共同研究を行なっていきたい。</p>
<p>備 考</p>	<p>朝水宗彦 論文1本： 朝水宗彦, ミシェル ラエンドラ「日本における遠隔地就労の元留学生に関する一考察：インドネシア人修了生の事例から」山口経済学雑誌 73(5) 1-17 2025年1月</p> <p>国際学会3件： 海外人観光客の遠隔地におけるMaaS導入に関する基礎的研究：山口県を事例として 35th International Geographical Congress, 2024年8月27日 ダブリン市立大学</p> <p>観光客から新規居住者へ:日本の農村部における再定住政策 China-Japan-Korea International Symposium Sharing the Future: Transformation, Collaboration, and Development of Asia-Pacific 2024年7月13日 招待有り, 山東大学</p> <p>衰退する日本、成長するインド:これからの国際関係を考える International Seminar on India Towards a \$7 Trillion Economy by 2030 2024年7月2日 招待有り, Manipur University</p> <p>新祖隆志郎 書評1件</p> <p>石 龍潭 1. 論文 石 龍潭「日本における行政手続法の法典化の道程とその中国に対する示唆」法治社会2025年第2期 石 龍潭「法によるデジタル政府づくりのあり方—日本の対処と示唆」行政法学研究2024年第5期</p> <p>2. 招聘講演 ・演題「日本における行政手続法の法典化の道程とその中国に対する示唆」 ・山東大学主催The fourth Shandong Forum 2024年11月9日</p>

備考	<p>田畑 雄紀「後期高齢者医療制度と介護保険制度の一体化に向けた考察」『Bao Xue Yan』 マガジン No.668 pp.227～248 2025年3月。</p> <p>Shinji Teraji (寺地伸二) "Leverage and bargaining power in a Kaleckian growth model" (「カレッキアン成長モデルにおけるレバレッジと交渉力」) Review of Political Economy 2024年36巻, 1号 pp. 137-153, Routledge. DOI: 10.1080/09538259.2022.2030585. 単著、査読有り</p> <p>寺地伸二「経済学におけるミクロとマクロ：マクロ経済学と制度経済学のそれぞれの研究から」東亜経済研究（特集 吉川洋先生 山口大学経済学部教育講演会・研究会）2024年83巻、1号. pp. 55-60. 山口大学東亜経済学会。</p> <p>(浜島清史) 特集「吉川洋先生 山口大学経済学部教育講演会・研究会」『東亜経済研究』第83巻 第1号 令和6年8月. 所収* (本書全体のコーディネーター・司会進行・脚注 まえがき・あとがき、担当.)</p> <p>八代 拓「1950年代型アジア太平洋地域主義からの離陸:日米の消えない影の下での三木イニシアティブ」Relations, "The International History Review", 2025年1月。</p> <p>山本勝也「論文1」</p>
----	---